2019年度東京都立高校一般入試

国語 入試分析

～入試ではこう出る！！～

【出題内容】

全25問　1問5点（1・2（漢字の読み取り・書き取り）は各2点、4-5（作文）は10点）

1・2の漢字問題は易化。「喝采」「渓谷」の読み取り、「計画をメンミツに立てる」の書き取りができれば全問正解であろう。

3・4の文章問題は例年並みで、4〔問5〕の作文問題も比較的書きやすいテーマ。文章をしっかり読んで、体験を例に挙げてしっかり説明できれば、**高得点が取れる**。なお5の評論文の問題では和歌が取り上げられた。基本的な知識は不可欠だが、国語はもちろん、社会でも取り上げられる歴史的な内容を含んでおり、**中1からの知識をずっと覚えている**ということがよい結果につながるように作られていることがわかる。

〈10年間の小説問題の出典〉

【平成31年】 三浦哲郎『燈火』
【平成30年】 澤西祐典『辞書に描かれたもの』
【平成29年】 あさのあつこ『一年四組の窓から』
【平成28年】 伊集院静『どんまい』
【平成27年】 原田マハ『斉唱』
【平成26年】 長野まゆみ『夏帽子』
【平成25年】 稲葉真弓『唇に小さな春を』
【平成24年】 松樹剛史『熟してはじける果実のように』
【平成23年】 小川洋子『ガイド』
【平成22年】 宮下奈都『スコーレ No.4』

★有名作家の**短編**からの出題が多い。**短編集**はもちろん、筆者の心情を綴った**エッセイ集**も手軽に経験を増やせる。

〈10年間の作文問題の主題〉

【平成31年】「新しい『何か』に出会うこと」
【平成30年】「自分の意志を持つこと」
【平成29年】「食生活と歴史」
【平成28年】「基本を身につけること」
【平成27年】「取り合わせの美」
【平成26年】「環境の持続可能性」
【平成25年】「住居と人間」
【平成24年】「『自分の言葉』で表現する」
【平成23年】「森林の価値」
【平成22年】「読書という積極的な営み」

★普段から**自分の体験や見聞を広げ、またそれを書き留めておく**とよい。（おすすめは、**日記**にすること。効果があります。）

実際の問題にチャレンジ！

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 役者の真に迫った演技が喝采を浴びる。
(2) 教室から朗らかな笑い声が聞こえてくる。
(3) 新緑の渓谷を眺めながら川下りを楽しむ。
(4) キンモクセイの香りが漂う公園を散策する。
(5) 著名な画家の生誕を記念する展覧会が催される。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 古都を巡る計画をメンミツに立てる。
(2) 道路をカクチョウして渋滞を解消する。
(3) 幼い子が公園のテツボウにぶら下がって遊ぶ。
(4) 吹奏楽部の定期演奏会が盛況のうちに幕をトじる。
(5) 日ごとに秋が深まり、各地から紅葉の便りがトドく。

5（一部抜粋）

むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

とよむとりけり。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

とて、その木のもとは立ちてかへるに日暮になりぬ。

昔、惟喬の親王と申し上げる親王がおいでになった。山崎の向こう、水無瀬という所に、離宮があった。毎年の桜の花盛りには、その離宮へおいでになったのだった。その時、右の馬の頭であった人を、いつも連れておいでになった。いまでは、だいぶん昔がたったので、その人の名は忘れてしまった。狩猟はそう熱心にもしないで、もっぱら酒を飲んでは、和歌を詠むのに熱をいれていた。いま離宮をとる交野の渚の家、その院の桜がとりわけ趣がある。その桜の木のもとに馬から下りて、桜の枝を折り、髪の飾りに挿して、上、中、下の人々がみな、歌を詠んだ。馬の頭だった人が詠んだ。それは、世の中に……（世の中に桜がまったくなかったならば、惜しい花が散りはせぬかとこを悩ませることもなく、春をめでる人の心は、のどかなことでありましょう。）

と詠んだのだった。もう一人の人が詠んだ歌、

散ればこそ……（散るからこそますます桜はすばらしいのです。悩み多いこの世に、何が久しくとどまっているでしょうか。何もないでありませんか。だから散るのも当然。ことにわずかの盛りの桜の華やかさを愛すべきです。）

という次第で、その木の下は立ち去って帰るうちに、日暮れになった。

〔問5〕(4) 鷹狩はそう熱心にもしないで、もっぱら酒を飲んでは、和歌を詠むのに熱をいれていた。とあるが、Bの原文において「和歌を詠むのに熱をいれていた」という部分に相当する箇所はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　常に率ておはしましけり
イ　やまと歌にかかれりけり
ウ　ことにおもしろし
エ　みな歌よみけり

Heart&Hard
北進ゼミナール